イリーナ・コジェーヴニコワのアーカイヴについて

太　田　丈太郎

1.

イリーナ・コジェーヴニコワ（1925−2011）は，ワルワーラ・ブブノワ（1886−1983）についての優れた評伝[1]の著者である。ブブノワはロシア・アヴァンギャルド芸術の最前線に身を置いていた画家であったばかりか，長年早稲田大学や東京外国語大学でロシア語とロシア文学の教鞭を執ったことで知られている。このブブノワの生涯を，多くの未刊行資料を駆使しながら初めて浮き彫りにしたのが，コジェーヴニコワの著作であった。

コジェーヴニコワの残したアーカイヴがどこにも行き場がなく，長い間モスクワのさる場所に眠っていた。かつての所有者から私が受け継ぐことになったため[2]，整理と意味づけをはじめたところだ。今年（2017 年）3 月にモスクワへ出かけた際，いくつか重要なエピソードを反映する資料を持ち帰った。そして 9 月，モスクワから玉石混淆の状態のまま，アーカイヴすべての回収を終えた。

コジェーヴニコワの仕事はもっぱらブブノワの評伝で知られることになったが，もとより日本と深い関わりを持っていた人物である。新聞『イズヴェースチヤ』や雑誌『ソビエト婦人』で活躍したほか，とりわけ 1960 年代半ばからは雑誌『ソヴェート文学』で働き，多くの日本の作家やロシア文学研究者たちと親交を深めた。

私個人にコジェーヴニコワと面識はなかったが，アーカイヴ回収を機会に，彼女とじっさいに親交のあった方たちやその縁者の方々から，イリーナさん（以下このように表記する）について，いろいろ話をうかがうことができた。目的のためには非礼をもあえてする典型的なソビエト型の人間，反対に，心のあたたかい，包容力のある人物など，評価はさまざまである。いずれにしても，「比類ない」人物であったことは間違いない。

イリーナさんの文書は二種類に分類できる。一つはブブノワに由来する文書である。

ブブノワの文書は，イリーナさん自身の尽力によりモスクワの RGALI（ロシア国立文学芸術文書館）に収められた（F.3310）。文書館目録の記載によると，2003 年から

1）イリーナ・コジェーヴニコワ『ブブノワさんというひと』（三浦みどり訳）群像社，1988 年。

2）2015 年 11 月 26 日付け，太田宛メッセージ。当人の希望で，名前を明かすことはできない。

08 年のあいだにイリーナさんが文書館に引き渡した。文書の時期は 1883 年から 2006 年まで，しめて 479 点の資料が 9 部に分けて収められている。個人的な書簡やメモ，写真，記事，原稿，なかには絵画作品（習作やスケッチブック）も含まれている。ようやく 2011 年 6 月に，一般閲覧が許可されるようになった。

とはいえ，なんらかの理由で文書館が受け取らなかったものがある。本稿で紹介するのは，この「非公式」のブブノワ文書である。1994 年，ブブノワの回想と論文，書簡類をまとめた本[3] が出版されたが，実際に残された書簡類は膨大な数にのぼり，たとえばブブノワが頻繁に手紙のやりとりをしていた友人ミチューリナ，アファナーシエワ，ハリャーピナなどの書簡もごく僅かな数が本に反映されているだけである。文書館が受け取らなかったものに，いまだ大量の書簡類（往復書簡で残っているものもある）が存在する。ほかにブブノワに宛てた米川正夫の書簡が 10 点（1 点は封筒のみ）[4]，八杉貞利の書簡が 3 点，ロシア未来派の研究者ハールジェフの書簡も 4 点が残されていることを特記しておく。これらの書簡も，ブブノワの回想・論文・書簡集に収録されなかった。

さらに，ブブノワが亡くなるまで手元に残していたらしい写真がある。早稲田大学や東京外国語大学の同僚たち，画家仲間や教え子たち，知人たちの写真が残されている。そのなかから，ブブノワが裏に「お気に入りの教え子」と記している佐々木千世（1933−1970）の写真を紹介する（裏には撮影者名「イシイ・シゲオ」とロシア語でメモ）。

3）Uroki postizheniia. Khudozhnik Varvara Bubnova. Vospominaniia, stat'i, pis'ma. M., 1994.
4）太田丈太郎「米川正夫のブブノワ宛書簡」『異郷に生きる VI』成文社，2016 年，243−254 頁。2016 年現在では 8 点（1 点は封筒のみ）であったが，全アーカイヴ回収の結果，全部で 10 点あることが判明した。

佐々木の身につけているワンピース，帽子，ネックレスは，画家の岡本唐貴が佐々木をモデルに描いた《みどりの石》（1958）という作品での装いとまったく同じで，たいへんに興味深い。岡本はブブノワと交際があり，米川正夫がブブノワに岡本の消息を書面で伝えている[5]。1962 年夏には岡本もソ連でブブノワと再会した[6]。

撮影者が版画家の石井茂雄（ブブノワの「親戚」オノ・ヨーコの従兄弟にあたる）であるなら，石井にも岡本と交際のあったことがうかがわれ，どうして石井によるこの写真の装いが肖像画で採用されたのかなど，興味は尽きない。

岡本唐貴の肖像画をめぐっては，佐々木自身がブブノワに手紙（ロシア語）で知らせている。1960 年 4 月 10 日付けのもので，モスクワの RGALI に保管されている。おそらく，ブブノワが 1958 年にソ連へ帰国して，妹の小野アンナ（日本のヴァイオリン教育の始祖というべき人物だ）とアブハジアのスフミにようやく落ち着いてから書かれた手紙だろう。

ところで，あまり知られていないことだが，1958−59 年の一年間，ワルワーラとアンナのブブノワ姉妹は極東のナホトカに留め置かれた。ブブノワのスフミ時代の教え子である画家アレクサンドル・ロゾヴォーイ氏がブブノワ本人から聞いた話によると[7]，縁者の住む都市に居住を許可するが，二度と国外へ出ることは許さない，と当局と取り決めがあった。二人の姉のマリーヤがスフミに住んでいたので，二人はスフミで暮らしはじめたのだという。佐々木の手紙から一部を引用しよう（日本語訳は太田による。以下同様）。

「親愛なるお母さん，ワルワーラ・ドミートリエヴナ！〈･･･〉いかがお過ごしでしょうか。お仕事は？今度は三姉妹でお暮らしになるのですね，素敵です！いつかかならずお宅へお邪魔いたします。きっとお目にかかりましょうね。

「いくつかお知らせがあります。まず，画家のドブルーイニャ［佐々木が当時訳していたロシア中世叙事詩『ブイリーナ』に登場する勇士の名前］（岡本唐貴）が『みどりの石』という題名でわたしの肖像画を描きました，絵は《アンデパンダン》展に出品されました。服は「スイサイ」のように色さまざまで，帽子は黄色，背景は暗緑色です。全体的に静謐な感じがします。ドブルーイニャ自身この絵が気に入っているようです。」

ひょっとすると，この手紙に佐々木は上の写真を同封したのかもしれない。

佐々木は 1961 年 7 月にロシア・東欧の一人旅に出て，『ようこそ！ヤポンカ』（婦

5）太田丈太郎「米川正夫のブブノワ宛書簡」『異郷に生きる VI』248 頁。
6）安井亮平編・訳『ブブノワさんの手紙』（安井亮平編・訳）未知谷，2010 年，24 頁。
7）2017 年 9 月 23 日，太田との談話（氏のモスクワの自宅とアトリエで）。

人画報社，1962 年）という旅行記を出版したのち，再度ヨーロッパへ出た。ドイツの大学で学位も取ったが，1970 年 3 月，一時帰国した折に自動車事故に遭い，若くして亡くなった。

「ブブノワさんは，日本を去るとき，養女のようにかわいがっていた大学生の S 女［佐々木のこと］を，わたしに紹介して行った。まだ若かったわたしは，まもなく S 女と恋におちいった。わたしたちは愛し合っただけ深く傷つき合った。それから破局が来て，S 女は外国へ去った。十年の歳月が流れた。外国で学位を取った S 女は，わずかの期間，帰国した。そのわずかな日々に，S 女は自動車事故で三十六歳の短い生涯を閉じた。『わたしは，あなたと S 女が結婚してくれればいいと，どんなに願っていたことでしょう』ブブノワさんは，こう語った。『あなたと結婚していれば，S 女もまさか・・・・・・でも，運命ですね』」

池田健太郎がスフミのブブノワを訪ねた際の思い出（1971 年 11 月）をこのように記している[8)]。

開高健の小説『夏の闇』でモデルにされたため，佐々木をめぐってはいまだにゴシップが絶えない。おそらく佐々木はいつもごく自然にふるまい，言動も自由気ままであったため多くの誤解と，とりわけ同年代の男たちから嫉み（「女のくせに」という蔑み）の対象になったのだろう。

佐々木の性格はその書面，ごく自然で伸び伸びとした彼女のロシア語にあらわれている。ブブノワも佐々木のそういう自然さを愛したのだろう。「モスクワで佐々木さんと会って，一緒に三日間過ごしました。佐々木さんはエネルギーと若さに溢れていました。あの人はとてもおもしろいので，人の目を引き，魅了します」－1961 年 12 月 8 日，ブブノワは教え子の安井亮平氏にこう書面で語っている[9)]。

ほかに小野アンナ由来と思われる文書や写真，またブブノワに宛てた石井茂雄の版画現物や，貴重な秋田雨雀直筆（ヴェーラ・マールコワの翻訳による石川啄木の歌数篇）の巻物も存在するが，割愛する。1935 年 5 月 1 日付けのマールファ・シェープキナ宛書簡のような，ブブノワの生涯の転変を考えるうえできわめて重要な手紙も存在するが，別に稿をあらためたい。

8）池田健太郎『わが読書雑記』中央公論社，1980 年，155−156 頁。池田健太郎のブブノワ宛書簡が一点のみ RGALI（F. 3310. Op. 1. No. 167）に保管されている。1973 年 4 月 20 日付けで，池田は雑誌『海』に連載中のプーシキンの生涯をめぐる記事（のちに『プーシキン伝』へ結晶する）への意気込みと手応えをブブノワに語っている。安井亮平氏宛のブブノワ書簡によると，池田からブブノワは何通か手紙を受け取っていたらしい（『ブブノワさんの手紙』26 頁）。池田の送った他のブブノワ宛書簡の所在は不明である。池田と佐々木が一緒に写っている写真も存在する。日付は 1959 年 3 月。

9）『ブブノワさんの手紙』20 頁。

2.

次に，イリーナさん本人に直接由来する文書と写真がある。「雪どけ」以降，頻繁に催されるようになった日ソ文化交流事業に，イリーナさんが精力的に携わっていた様子がうかがえる。

イリーナさんが初めて日本にやってきたのは東京オリンピックの頃だった。「この最初の，しめて一週間の旅行はとても充実していた。たくさんのものを見せられた。わたしたちもたくさんのものを見ることができたが，一番はまるで別の惑星にでも来たかのような感じがしたことだった。アンドレイ・タルコフスキー［ソ連の映画監督］が《ソラリス》で，未来都市をイメージして東京のトンネルで撮影したショットを挿入したのもなるほどと思われた」[10]。戦後の高度成長まっただなかの日本，新幹線や首都高速の東京にイリーナさんは驚きの目をみはった。

二度目は1966年，東京・駒場の近代文学館で開催された「トルストイ展」に通訳として来日した。このときは約半年間（東京に三ヶ月，大阪に三ヶ月），日本に滞在した。「展覧会には多くの有名人がやってきた。いちばん記憶に残っているのは皇太子様，今の天皇陛下と美智子様がご夫婦で訪問されたことだった」[11]。イリーナさんは，トルストイ展がきっかけで多くのロシア文学研究者たちと知り合いになり，彼らからブブノワのことを初めて耳にすることになった。

その前年，1965年9月30日から10月2日まで，モスクワの文学者中央会館会議室で「第一回日ソ文学シンポジウム」が開催された。テーマは「現代文学におけるヒーロー」。日本側は長谷川四郎を団長とし，井上光晴，泉大八，小田実，島尾敏雄，菅原克己，中薗英助，中村真一郎，針生一郎，宮本研が出席。同時期に開催された「日ソ翻訳者ゼミナール」に参加した江川卓，原卓也，木村浩，中里迪弥，水野忠夫，工藤幸雄（中村融，丸山政男も），さらにべつにソ連滞在中だった大原富枝，奥野健男，田村泰次郎も加わった。ソ連側からはスルコフ，エレンブルク，ボチャローフ，シーモノフその他，有名なところではエフトゥシェンコ，アクショーノフ，トリーフォノフ，ロマーン・キム，アルカージー・ストルガツキー，ヴェーラ・マールコワ（後述）などが出席した[12]。

イリーナさんのアーカイヴに，そのとき訪ソした島尾敏雄と中里迪弥（中里介山の甥）の写真が残されている。ナホトカから横浜までの帰りの船（「バイカル号」）で書いた絵はがきもある。

10）*Kozhevnikova Irina* Moia podruga iablonia. Novelly, povesti. M., 2010. S. 156.
11）Tam zhe. S. 157.
12）「日ソ文学シンポジウム　現代文学におけるヒーロー」『新日本文学』第222号（1966年1月），170−222頁；同，第223号（1966年2月），66−102頁。

Цветное фото П. И. Смолякова.
Редактор В. М. Рапопорт.

КАРТОЧКА ПОЧТОВАЯ

今、バイカル号の船上にいます。
モスクワでひいた風邪もすっ
かりなおりました。モスクワにおける様々な印象
が、私の脳裏で強烈にめいめいしております。
家へ帰りましたら、長い手紙を書く積りです。では!
Митяя, наказато.
飛行機の中でも汽車の中でも眠れま
せんでした なんだか モスクワの日が短か
かった 日本に帰っても しばらくは ぼん
やりしているでしょう また いつの日か お会
いできるでしょう さようなら、フローラさんにもよろしく
Благодарим вас за сердечное внимание!
Желаю Вам здоровья и счастья!
Передайте, пожалуйста, от нас
привет своим близким!

Куда СССР. Москва,
ул. Добролюбова 9/11
"редакция "Советская Литература"
Кому И. П. Кожевникова-Сан

Адрес отправителя:
Ситдао Тосио
Митяя Наказато

Издание Министерства связи СССР. А 05504 Отп. 25. МПФ Гознака. Зак. 1969. Цена художественной открытки с маркой 4 коп.

島尾敏雄と中里迪弥がイリーナさんとともに，ボルゾイ犬と写っている。中里迪弥の没後（1969 年 4 月に猟銃自殺した）に編まれた論集『マロース』によれば，狩猟と猟銃に関心をもつ中里は，おそらくイリーナさんの口利きで，ボルゾイ犬のブリーダー（ガリーナ・ゾートワ）宅に招待された。イリーナさん，島尾敏雄と一緒に三人で訪問した。

「わたしは友だちのイリーナさんと作家の島尾敏雄さんと三人で出かけて行ったのである。ゾートワさんの家について，わたしたちがまずおどろいたのは，山羊よりも大きいボルゾイ犬たちが，四頭部屋で飼われているということであった。きれいに整頓された居間と客間をかねた部屋のなかに，四頭の立派なボルゾイ犬が立っているのである。まったくおどろくよりほかになかった。犬たちは命令されると，机の下とか，ベッドのわきとか，部屋のすみだとかにある自分の寝場所にさっと行って，ねてしまう。《こい》というと，すぐ寄ってくる。じつによく仕込まれている。

「四頭ともさまざまな美しい毛色をしている。にんじん色に褐色がかった黒，白いなかにオレンジ色の斑点のあるもの，まっ白い毛色をしたものなど・・・。犬たちはまるで風呂あがりのようにきれいに手入れがゆきとどいている。ふさふさした白い毛の房は，光のあたり具合で銀色に輝くことさえある。

「その顔付きといい，スタイルといい，優雅で気品があり，まさに犬のなかの王様と呼ばれるにふさわしい威厳さえそなえているのである。

「わたしたちは立つと人間の背丈ぐらいにもなる優美なボルゾイたちにかこまれながら，犬たち，動物，狩猟，動物物語などの話に夢中になった。わたしは自分が鉄砲射ちになった動機，自分の仕込んだ犬たち，日本の猟野の美しさ，危険だが最もスリリングな山鳥射ちなどについて，たどたどしいロシア語で話した。」[13)]

このボルゾイたちは，セルゲイ・ボンダルチュクの大作映画『戦争と平和』にも出演した名犬たちであった。ロシアの自然はもとより，犬やオオカミの鳴き声，鳥たちの鳴き声など，通常のロシア文学者とはちがう独特の視点（擬声語）からロシア語とロシア文学を見きわめようとしていながら，若くして亡くなってしまった中里の才能が惜しまれる[14)]。

岩浅武久氏が 1968 年 7−8 月にかけて訪ソした折，イリーナさんから中里へのお土産を託されたという。それは野鳥の声だけを録音したレコードのセットで，東京・羽村の中里宅に岩浅氏が届けに行ったところ，中里は非常に喜んだという。イリーナさんの細やかな心遣いがうかがえるだろう。中里の亡くなる八ヶ月前のことだった[15)]。

イリーナさんは島尾敏雄とも，島尾の没後はその家族とも懇意にしていた様子である。島尾がイリーナさんに贈った新年カードが二通（一通は家族連名のもの），また島尾の没後に作家の家族と撮った写真（長男・島尾伸三氏の撮影）がいくつか残されている[16)]。

3.

イリーナさんが日本の子どもたちにかこまれながら，なにやら楽しそうに話している写真がある。子どもたちの表情がじつに豊かだ。イリーナさんのすぐそばに立っている男の子も，そのうしろの女の子も，とても大事そうに本を抱えている。写真左端

13）中里迪弥『マロース　ロシア・ソヴェト文学反古籠』未来工房，1983 年，140−141 頁。
14）水野忠夫「若きロシア研究者の遺稿」『ロシア読書ノート』南雲堂，143−150 頁。
15）2017 年 3 月 1 日，岩浅武久氏より太田宛メール。
16）島尾敏雄の『夢のかげを求めて　東欧紀行』（河出書房新社，1975 年）で「イリーナさん」と言及されているのは，イリーナ・コジェーヴニコワのことである。

の女の子などは目を輝かせて，イリーナさんをじっと見つめている。おそらく，イリーナさんが日本語を話すことを面白く思ったのだろう。

これは1971年5月15日，イリーナさんが児童文学者いぬいとみこの起ちあげた「ムーシカ文庫」を訪ねた折の写真である。東京・練馬で「ロールパン文庫」を主宰している小松原宏子氏から，写真の場所と日付をご教示いただいた。小松原氏が編集した『ムーシカ文庫の伝言板』という本に，同じときに撮られたとおぼしき別の写真が掲載されている[17)]。

イリーナさんといぬいには，ひとかたならぬ縁（えにし）がある。いぬいが家庭文庫活動（児童作家が子どもと接する場としての図書館運営と読み聞かせ活動）を始めるにあたって，ロシアの児童文学者コルネイ・チュコーフスキーと出会ったことが大変な刺激になった。チュコーフスキーの『二歳から五歳まで』という本を読んでとても感激し，モスクワ郊外ペレジェールキノに住む当人に会いに出かけ（1963年と64年；チュコーフスキー没後の71年にも墓参のため訪ソ），そのときこの重鎮作家と話したのがきっかけで「ムーシカ文庫」を始めることになった。その場に居合わせ，対談のお膳立てをしたのが，ほかならぬイリーナさんだった。その痕跡はチュコーフスキーの日記に見ることができる。

「6月18日［1964年］

〈…〉愛らしいイヌイがたったいま帰ったところだ，イヌイがくれたペンで今これを書いている。彼女の児童書（散文）は英語の強い影響で書かれている，わたし

17）ムーシカ文庫の仲間たち編『ムーシカ文庫の伝言板　いぬいとみこ文庫活動の記録』てらいんく，2004年，66頁。

は児童図書館［チュコーフスキーがペレジェールキノに創設した］に彼女の本と肖像写真をいくつか展示した。イヌイはキモノをはおって，一緒にペレジェールキノの通りを散策した。イヌイと一緒に，ドルージバ［友好］大学の学生二人，田中泰子と田中雄三（夫婦）と，『ソビエト婦人』のイリーナ・コジェーヴニコワがやってきた。わたしはヴェーラ・マールコワ［日本学者，イリーナさんの日本語の恩師；石川啄木の翻訳で知られ，レニングラード時代，恩師コーンラドを通じて鳴海完造（後述）の友人でもあった］とその夫で画家のレオニード・エヴゲーニエヴィチ［フェーインベルク］も誘った。マールコワはすばらしい翻訳家で，日本語を流暢に話す。イヌイはすてきな笑い方をする，わたしはこんな笑いを聞いたためしがない，まるで笑いだそうとしたけれど，途中で思い直してやめてしまったかのような笑い方だ。イヌイの笑いにはなんだか子どものようなところがある。わたしたちは『創作の家』，マールコワのところ［マールコワと夫フェーインベルクは『創作の家』に滞在していた］へ出かけたが，そこで日本人たちは日本の民謡［《サクラ》や《隅田川》，ショジョジのタヌキ囃子の歌も］を小部屋でいくつか唄った。その後連中はリーリャ・ブリークとカタニャーンのところへ行き，ノヴェーラ・マトヴェーエワを誘った。マトヴェーエワは「大風」と「街はずれ」をうたった。今日わたしはエフトゥシェンコとアフマドゥーリナと少しだけ知り合った。」[18)]

いぬいとみこ自身の記事によると，いぬいの手元にはチュコーフスキーからの手紙が「24 通」もあったようだが，いまや行方がわからない[19)]。いぬいが訪問した頃はまだ「雪どけ」の雰囲気（「エフトゥシェンコとアフマドゥーリナ」）が残っていたペレジェールキノのチュコーフスキーの家も，1960 年代末の作家の没後は反体制作家ソルジェニーツィンを匿ったとの理由で当局から没収されそうになったうえ，家族は立ち退きをせまられ，これをめぐって長い間裁判沙汰になった。1974 年には，娘リージヤ・コルネーエワは作家同盟から除名された。

1971 年のチュコーフスキー墓参から帰って，いぬいはリージヤ・コルネーエワから手紙を受け取った。「生前チュコフスキーが愛した小さな緑色の子どもの図書館は，やはりいまもたしかに生きているし，書斎も庭も生前そのままに，大切に保存されている」という内容だった[20)]。それへのロシア語による返事（1971 年 7 月 8 日付け；田中かな子による達筆のロシア語）が現在 RGALI に保管されているが[21)]，リージヤ・

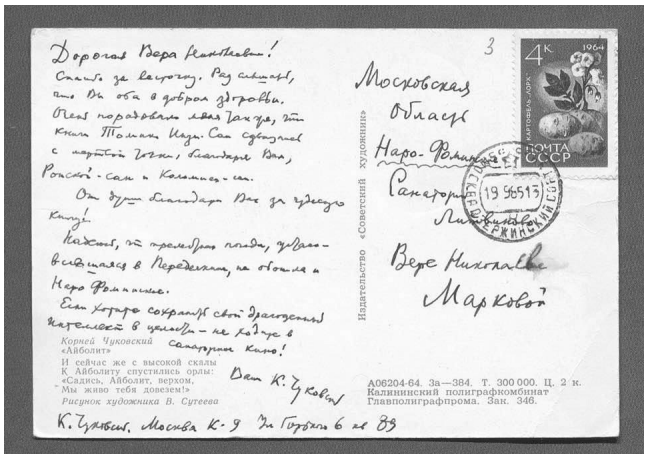
18）*Chukovskii Kornei* Dnevnik. 1936−1969. M., 2012. S.388.
19）いぬいとみこ「たった一人の先生の思い出」『ソヴェート文学』第 80 号（1982 年夏），142 頁。
20）いぬいとみこ『子どもと本をむすぶもの』晶文社，1974 年，11 頁。
21）RGALI F.3390. Op.1. Delo 443. L.1−2. この手紙によると，いぬいの手元にあるチュコーフスキーの手紙の数は 20 通とされている。

コルネーエワという反動期ソ連（「雪どけ」の揺り戻し）の貴重な歴史の証人による手紙現物も，いまや行方知れずのままである。当局から迫害を受け，今日ペレジェールキノにあるチュコーフスキーの家と児童図書館が博物館として多少とも再び機能しはじめたのは，ようやく二十年前，1996 年に国立文学博物館（GLM）の分館になってからのことだった。

イリーナさんは，いぬいの『うみねこの空』（1965）をアーラ・コロミーエツとの共訳で出版した（1968 年；ロシア語の題は『カモメの歌』）。当時イリーナさんは日本の児童文学をさかんにソ連の読者に紹介しはじめていた[22]。チュコーフスキーのマールコワ宛のハガキを読むと，その出版にあたってはマールコワも少なからず尽力したことがわかる。「ようやくイヌイトミコさんの本があなたやローンスカヤ［松谷みよ子『竜の子太郎』の訳者］さん，コロミーエツさんのおかげで停頓から動きはじめたとうかがって嬉しく思います」（1965 年 9 月 19 日；消印）[23]。

当初はこのように手紙に書いていたチュコーフスキーだが，現実に本が出版されてみると，別の反応を見せた。『うみねこの空』についてのチュコーフスキーの反応を，マールコワが後年書き残している。1983 年に記された「私が知っていた人々」という未発表の回想で，それによるとチュコーフスキーは「オリュンポスの神々ばりの憤怒に」猛り狂い，いぬいの書きものを徹底的にこきおろした。

「じっさい，いぬいとみこはナイーヴで脆弱な作家だったが，最良の魂のほとばしりをもっていた。このこともコルネイ・イワーノヴィチの目には彼女の本のずさ



22）「ソ連っ子に日本の童話」『日本経済新聞』昭和 46 年 5 月 5 日，第 20 面；「日ソ児童文学のかけ橋　イリーナ・P・コジェウニコワさん」『毎日新聞』昭和 46 年 6 月 2 日，第 13 面。

23）RGALI F.2841. Op. 1. No. 147. L. 3.

んさ，形式のなさ，才能のなさを穴埋めすることにはならなかった。〈･･･〉『まったくあれはどうしようもない！』悪い本，もっと言えば救いようのない本は，すぐさま容赦なくコルネイ・イワーノヴィチの罰を受けるのだった。いぬいとみこが何も知らないし，今後も知らないでいることは幸いだ。彼女はコルネイ・イワーノヴィチの墓参にまで来たのに・・・・・・」[24)]

マールコワの回想に，ひょっとすると歴史＝時間の容赦ない評価があらわれているのかもしれない。チュコーフスキーの熱しやすく冷めやすい性格に鑑みても，『うみねこの空』は，いぬいの代表作の一つとはいえ，教育的イデオロギーが先行するばかりの，「遊び」の要素の少ない生真面目な，退屈な話である。翻訳の問題（私見ではロシア語訳のほうがまだしも読むに耐える）もあったのかもしれないが，ロシア語訳も原作の退屈さを覆い隠すことはできなかった，というのが実情だろうと思われる。

4.

イリーナさんが「ムーシカ文庫」を訪ねたとき，一緒に写っている中年のロシア人女性が誰なのか，しばらくわからないままでいた。イリーナさんの残した他の写真を丹念に見て，ようやく手がかりが見つかった。「ソ連所蔵名品百選展」という東京・上野の国立博物館で開催された展覧会の写真である。東京国立博物館と京都国立博物館，また日本経済新聞の主催による展覧会で，1971 年 4 月 10 日から 5 月 30 日までが東京，6 月 8 日から 7 月 25 日までが京都で開催された。

またイリーナさんのアーカイヴから，当時の新聞切り抜きがいくつか出てきた。それによると彼女は通訳としてエルミタージュ美術館古代美術部長のゴルブノーワ，トレチャコーフ美術館研究員のヨーヴレワと来日したのである。「ムーシカ文庫」でイリーナさんと一緒に写っていたのは，いろいろな写真から判断してゴルブノーワである。おそらく主催者の日本経済新聞がエクスカーションをお膳立てしたのだろう，東京・駒場の「日本民藝館」で撮った写真や，海辺の写真（神奈川県真鶴町の三ツ石海岸で），箱根で撮影された写真（旧街道の杉並木，美術館，富士を背景に記念写真）がいくつも残されている。イリーナさんとゴルブノーワの服装から判断して，いずれも「ムーシカ文庫」を訪問した 5 月 15 日と同じかその前後と判断される。目白台の椿山荘庭園にある「五丈瀧」で撮った写真もあるので，あるいは椿山荘（早稲田大学からほど近い）を宿にしていたのだろうか。

展覧会のカタログによると古代ギリシアやオリエントの，ルネサンスの，さらには

24）RGALI F.2841. Op. 1. No. 64. L. 16.

ロシア美術の逸品百点が選び抜かれ，たいへんに盛況だった様子である。目につくところでは，エルミタージュ美術館のコレクションからモネ，ルノワール，セザンヌ，ゴーギャン，マティス，ピカソが出品されている。トレチャコーフ美術館（およびロシア美術館）からは，数々のイコンはもとより，レーピン『お転婆娘』，レヴィターン『永遠の静けさ』，ヴルーベリ『白鳥の女王』，ペトロフ＝ヴォートキンの『赤い馬の水浴』，クストージエフ『シャリャーピンの肖像』『地方の秋』，その他ユオーン，ジリンスキーなどが出品され，今日から振り返っても非常に意欲的な展覧会であったことがわかる。

イリーナさんが保管していた当時の新聞記事から興味深いエピソードを紹介しよう。それによると，なんでも会場に「質問コーナー」（ジリンスキー『家族』の前；東京会期中にしめて三回；午前十時半から一時間）をもうけ，来館者が「生き字引」であるゴルブノーワ，ヨーヴレワに，イリーナさんの通訳で質問をぶつけることができた，というのだ。「どうしてソ連の美術館に世界一流の作品がこんなにたくさんあるのか」とたずねる修学旅行中の高校生，「ソ連の子どもの美術教育はどうなっているのか」と聞く子ども連れの母親，また「ソ連ではなぜ抽象画が受け入れられないのか」とたずねる事情通の大学生もいて，記者によると「会場では時ならぬ“社会主義リアリズム論争”が展開」されたという[25)]。

横浜・大桟橋で撮影された写真がいくつも残っている。写真から判断するとイリーナさんは東京での会期の終わった6月2日，ヨーヴレワと一緒に帰国した。ゴルブノーワ一人が残って京都会場に付き添ったようだ。写真には，見送りに来たのだろう，早稲田大学露文科の黒田辰男と文芸評論家の奥野健男が夫人同伴で写っている。

イリーナさんが奥野健男と知り合ったのは，おそらく1965年の「第一回日ソ文学シンポジウム」の折だったと思われるが，その後もイリーナさんは奥野夫妻とはとくに親しくしていた様子で，来日のたびに家族ぐるみの交際があった。イリーナさんの残した写真には，いろいろな時にいろいろな場所で撮影された奥野とその家族と一緒の写真が多数存在している。奥野自身が亡くなってからも，奥野夫人（道子）とはとくに親しくしていた様子で，家族ともども手紙のやりとりのあったことがうかがえる。

イリーナさんはこのように，おもに日本語通訳として働きながら，日本での幅広い人脈を形づくっていった。数多くの日本の文学者やロシア文学研究者と知り合うなかで，イリーナさんはいつの頃からかワルワーラ・ブブノワについて関心を持つようになった。ブブノワのことを最初に聞いたのは早稲田露文の黒田辰男からだった，と逝去直前に出版した自身の創作短篇集あとがきで述べているが[26)]，黒田以外にもブブ

25）「美の美問答花咲く　ソ連百選展の質問コーナー」『日本経済新聞』昭和46年5月21日，第19面。

26）*Kozhevnikova Irina* Moia podruga iablonia. Novelly, povesti. S. 157.

ノワの教え子や同僚たち，またブブノワの画家仲間たちからブブノワのうわさを耳にすることは数知れなかったのではないか。「日本民藝館」を訪問したのは，ブブノワの日本での創作版画活動のことが頭にあったのかもしれない。自身日ソ文化交流における連絡役として活躍しながら，イリーナさんはブブノワを含めて日本とロシアのあいだで橋渡しをした人物たち（高田屋嘉兵衛とゴロヴニン，ワノフスキーなど）に強い関心を持つようになった。1974 年の秋，イリーナさんはスフミのブブノワ宅を訪問する。ブブノワを教育者としてばかりでなく画家として広く知らしめた点で，イリーナさんは日本はもとよりロシアにおいても比類ない，優れた仕事を残すことになった。

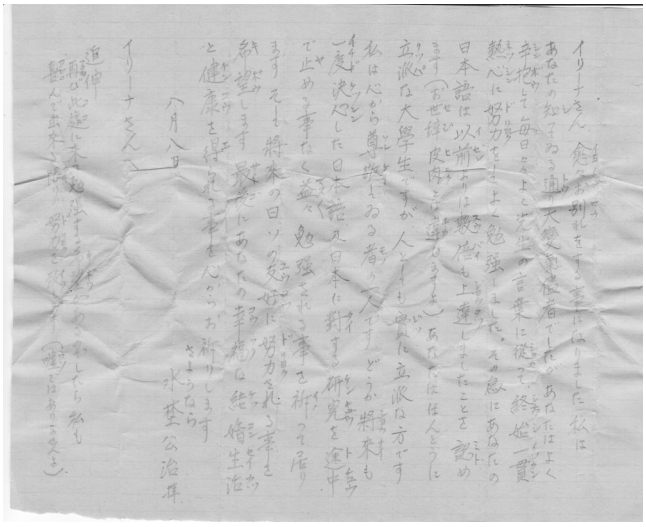
5.

イリーナさんのアーカイヴから，ソ連に抑留されていた日本人捕虜の手紙が出てきた。日付は 1948 年 8−9 月，ロシア語のものと日本語のものがある。タタールスタン共和国，ヴォルガ河畔の都市カザンの西にゼレノドーリスクという街があり，そこに少なくとも 1948 年 6 月から 9 月にかけて，日本人捕虜がドイツ人捕虜とともに収容されていた。「抑留者」というと私たちはイルクーツクやハバーロフスクなどシベリアの収容所を思い浮かべるが，極東から遠く離れた場所にも日本人捕虜が収容されたラーゲリがあり，強制労働させられていた。

ロシア語の手紙の署名は「ヨコヤマ・カネモリ」とあり，日付は 1948 年 9 月 30 日。筆跡から判断するに，文法的な誤りが散見できるとはいえ，かなり専門的にロシア語を勉強した人物に思われる。日本語の手紙の署名には「水埜公治」とある。どうやらインテリの将校だったらしい人物による達筆の手紙である。手紙は旧字体・仮名遣いで書かれ，一枚一枚丁寧に折りたたまれている。

まず，8 月 8 日付けの手紙から引用する（現代仮名遣いに修正した）。

「イリーナさん，愈々お別れをすることになりました。私はあなたの知っている通り大変気儘者でしたが，あなたはよく辛抱して毎日々々よく先生の言葉に従って終始一貫熱心に努力をしてよく勉強しました。その為にあなたの日本語は以前よりは数倍も上達しましたことを認めます（お世辞皮肉とは違いますよ）あなたはほんとうに立派な大学生ですが，人としても實に立派な方です。私は心から尊敬している者の一人です。どうか将来も一度決心した日本語，及日本に対する研究を途中で止める事なく益々勉強される事を祈って居ります。そして将来の日ソの友好に努力される事を希望します。最後にあなたの幸福な結婚生活と健康を得られることを心からお祈りします。さようなら。八月八日　水埜公治拝」



イリーナさんはどうやら複数の日本人捕虜から日本語の個人指導を受けていた様子である。日本との講和条約すら公には俎上になかった時代に，すでにロシアのラーゲリで「日ソの友好」という言葉が，たとえ当局由来の「宣伝」ではあれ捕虜の口から出ていたことに，正直戸惑いと驚きを禁じ得ない。言うまでもなく日ソ国交が正常化するのは1956年（手紙の8年後），平和条約は結ばれないまま今日に至っている。

イリーナさんはなんらかの理由で9月半ばまでラーゲリに居残った。9月15日付けの手紙で水埜は彼女をどういうわけか「百合子さん」と呼びかけている。「イリーナ」というロシア語の音が日本語の「ユリ」の音を惹起したのか，うら若い女性を百合のように理想視したかったのか，わからない。その生き生きとした若さのためだろうか，イリーナさんは水埜に保護者的な気持ちはむろん，なにかしら抒情的とすら形容できる感銘を与えたようである。

「百合子さん，お誕生日おめでとう。益々御健康を御祈り申します。次に突然ですが，ラポーター［ラボータ，労働のこと］の人員が増加になり語学の先生も殆んど召集せられ，その為に折角の誕生日而も最後の御別れの大切な日なのに命令に依り私はラポーターに参ります。大変残念で仕方ありませんが御許し下さい。本は三冊御返し申します。午後三時前には帰って来ますから若し汽車の時間がありましたらまた御会いする事も出来ると思います。では左様なら。呉々も御体大切に。お父様によろしく。九月十五日午後十一時　公治拝」

翌日の9月16日がイリーナさんの誕生日であった。誕生日や父親のこと，自分の病気（肋膜を悪くしていた）のことなど，かなりプライベートなことまでイリーナさ

んは水埜に話した様子だ。手紙から判断するに，誕生日を区切りとして 9 月 17 日の午前中，イリーナさんはとうとうモスクワへ出発した。それまでに水埜はもう一通，イリーナさんに手紙を手渡した。こころの琴線に触れるかのような文面である。

「〈･･･〉この手紙はモスコー迄は大変時間が長いのでその間にあなたに読んで貰う為に書くことにしたのです。百合子さん，愈々あなたとお別れせねばならない時が来ました。想い出せばあなたとお会いしたのは多分六月十日頃だったと思います。あの部屋で，あの姿で，あの帽子で，その時私はこのお嬢さんは大変美しいオシャレな人だと思いました。〈･･･〉その後私はここに住む様になり今日は九月の十七日です。丸三ヶ月の期間あなたと勉強したのです。その時間は勿論短い月日ですが，毎日の様に二人だけで勉強したのですから，次第々々に（だんだん）よい友達になり又あなたはいつも云う様に大変温しい優しい頭のよい努力のするそして先生の教えることをよく守る立派な生徒でした。私は今迄沢山の生徒を教えたことがあるのですが［教員をしていたのか？達筆の英字を書く，英語の歌が好きだった様子］，あなたの様に熱心に，一生懸命に勉強した生徒はありませんでした。〈･･･〉この三ヶ月間よく勉強して呉れました。そのためあなたは大概のことは日本語で話せる様になり又聞き取れる様になったのです。今年のソ連邦の農業収穫率は百％を超過して居ると思いますが，あなたの収穫率は二百％三百％を超過して居る事と確信して居ります。それは十月に学校が始って会話の時間になれば，きっと教授は驚かれることと思います。その時に教授の知らない言葉を質問して教授を攻撃してはいけませんよ。〈･･･〉これが一生のお別れになるかも知れません，そんなことを思うとあなたとお別れする明日のことが何だか恐ろしい〈･･･〉ほんとうに恋人と永久の別れをする時の様な感じです。どうかどうか百合子さん，あなたの理想とされて居る立派な方と結婚されて一生を楽しく送って下さることを心の奥底より祈って居ります。〈･･･〉そして若し日本であなたとお会い出来る時があればその時には昔の話，私の教えた日本語で，而も私は俘虜ではなく思い切って楽しいお話を致しましょう。さようなら。九月十六日夜　あなたの先生　公治より　百合子さんへ」

つづいて 9 月 17 日から 26 日まで，水埜は「日本語教材」として「返事なき手紙」と題し，めんめんと自分の身辺を記している。「想えばカザンで初めて会ってから約三ヶ月間，時には喧嘩をし，叱りも誉めもし或は友達の様に仲好く，心配をする時には一緒に心配を又笑う時には一緒に笑って過した生活でした」（9 月 17 日）。日本人捕虜の日常の一端がうかがえるので，長くなるが以下に引用する。

「あなたがモスコーに出発しましたのでこれで愈々語学の先生も失職してしまいました。昨夜ラポーターの人員を増加せよとの命令があり将校を除く全員は殆んど出動

する様になりました。従って私の様に体位一級クラスの者はたとえ将校であっても毎日の様に働かなくてはならなくなりました。ところが下赤さんが二三日ラポーターに出る様になりましたので律子さん［イリーナさん同様日本語を学ぶロシア人学生］の臨時の先生として私に行く様に命ぜられました。〈･･･〉今夜は月見，日本では月見と云って九月の満月（圓い月）の時には一年中の最も美しい月として観賞する習慣があります。〈･･･〉私は夕食後一人で表に出てこの一年に一回の月を見て大変感傷的な気持になりました。〈･･･〉今百合さんはモスコーに到着して地下鉄に乗って心はお父さんの許に走って居ることでせう等と思い乍ら」（9 月 18 日）。

「今日はラーゲルの国際運動会の予定だったのですが，朝から雨が降って中止になりそうです。〈･･･〉然し天気が少し良くなって試合が開始されました。日本人は人数は少ないですが仲々頑張りました一〇〇〇米で藤本さんは最後の決勝点の前で雨のために足を滑らして転んだために二等になり遂にゲルマンに栄冠を取られましたが二，三，四，五等はヤポンスキーでした」（9 月 19 日）。「今日も下赤さんの交代として律子さんに日本語を教えました。唯話をするだけで実に空虚なものです。あなたは今日色々のお友達と会った事でしょう」（9 月 20 日）。「昨夜と同じ様に午後律子さんとの勉強です。矢張りあの部屋で。教えて居て時々これが百合さんだったらと思いますが，律子さんの大きい声でその夢は現実にかわります。あなたはほんとうに静かな声で，静かな表情で先生の言葉の一言一句一生懸命聞いて居ました」（9 月 21 日）。

「今日から愈々ラポーター〈･･･〉若い人達と元気よく歌を歌い乍ら朗らかに労働者に転向，朝六時半には出発現地に着けば既に機械はグルグル廻って私達を待って居ます。機械と人間との競争」（9 月 22 日）。「今日のラポーターは「カパーチ」［穴掘り］横山さんだとか親しい友と仲よく根気よく同じ仕事を続けて居ます。〈･･･〉可愛い子供が今日も私の処に来て話をしますが，私は勿論何を云って居るのか解りません。時々抱いては昔を偲んで居りますが，私が抱いても決して泣かずに安心して抱かれて居ます。あなたの云う恐しい分室の俘虜だと云う事を知らずに（これは一寸皮肉ですね）」（9 月 23 日）。作業中の日本人捕虜に子どもが話しかけてくる，しかも抱いても怖がらない，というのは意外なディテールだろう。水埜は自分の子どもたちを思い出したのだろうか。

「昨日一昨日の重ラポーターの為に今日は體全体が傷いです。長い間美しいお嬢さんとお話をして居て労働をしなかった罰でしょう。〈･･･〉今日はラストボール（セメントヲネッタ土）の運搬です。これも仲々骨の折れる仕事です。〈･･･〉じっとして居ると寒いです。だって三階の練瓦の上に立って居るのですから。ターチカ（一輪車）を推して三，四回運搬して来ると温くなります」（9 月 24 日）。どうやら住宅建設の作業をさせられていた様子である。

「今日は休みの番に当りました。朝からゆっくりあなたへの手紙を書いて居ました

処，炊事のジャガイモ（カルトーシカ）の皮をむく作業が臨時に出来ました。〈･･･〉午後六時の点呼の時でした。突然乾草運搬として五名を出せとの命令です。私は今日建築作業に出て居りませんので又々私の番です。〈･･･〉この作業は前に百合さんにお話したボルガの鉄橋の付近で船から乾草を運ぶ仕事です。今日は雨が降って道路は大変悪いその上晩のことですから外は暗くて歩くのに困難です。〈･･･〉私はふと疲れて鉄道線路の方を見るとカザンからの列車が今しも（丁度）鉄橋を渡ろうとして居ります。私はすぐあの列車だ，あなたを乗せてモスコーに行ったのはと直感し，ああそうだ今時間は九時だなと思い乍ら，その列車の窓の燈の列が見えなくなるまで茫然と見送るのでした」（9 月 25 日）。

「友達等が君はいつも此の頃手紙をよく書いて居るが何を書いて居るのかと不思議に思って居ります。〈･･･〉私はこれは返事なき手紙でこれが最後の手紙になるのだから，尚日本語の練習書の積りで書いて居るのだと答えましたところ，どうだか知らないがあやしいぞ，恋文の様だよとひやかします。僕は即座（すぐにと云う意）に俘虜に恋なんかあるかい，熱心に勉強した彼女への贈物だ，僕には妻もあり子供も五人もあるのだよと大笑いしました」「私の日記もこれで終ります。〈･･･〉百合さんこの便りは読み完ったならば焼き捨てて下さい。勿論友達にも見せてはいけません。それに翻訳もしてはいけません，禁じます。と云うのはあなたは将来小説家になるかも知れませんから」（9 月 26 日）。

6.

日本人将校・水埜公治の手紙をイリーナさんのアーカイヴに私が見いだしたのは，今年（2017 年）3 月のことである。当初はいったいこの人物がどういう経歴の持ち主なのか，皆目見当もつかなかった。万が一シベリア抑留者の名簿に名前がないか「全国強制抑留者協会」に問い合わせたが，なにもわからなかった。ところが，この 7 月にふと思いついて中国帰還者の名簿に水埜公治の名前がないか「NPO 中帰連平和記念館」事務局に問い合わせたところ，同姓同名の人物の住所が見つかった。イリーナさん宛手紙全文のコピーを同封し，その住所へ手紙を書いたところ，8 月 6 日の広島原爆の日，水埜公治の孫にあたる方からお返事をいただいた。本人は平成 8（1996）年 5 月に他界している。

水埜公治は満洲の第 126 師団砲兵 126 連隊 2 大隊所属の少尉であった[27)]。1911 年 11 月 13 日，大阪市南区三津寺町に生まれた。父・與兵衛は大阪市議会議員を務めていた。イリーナさん宛の手紙にうかがえる（英語の歌を口ずさむ）ように，かなり裕

27)『帰ってきた戦犯たちの後半生　中国帰還者連絡会の 40 年』新風書房，1996 年，［99］頁。

福な家庭に育ったらしい。箕面市に転居後，大阪外国語大学（大阪外国語学校だろうか？）を卒業，私にお返事をくださった孫にあたる方の記憶では，すこし中国語を話した。昭和 11（1936）年，広島出身の女性と結婚，男二人・女三人の五人の子ども（ほかに長女がいたが，誕生後満洲で逝去）に恵まれた。満洲に渡ったのがいつ頃なのか不明だが，おおかた結婚と同時に大陸へ向かったのではないか。

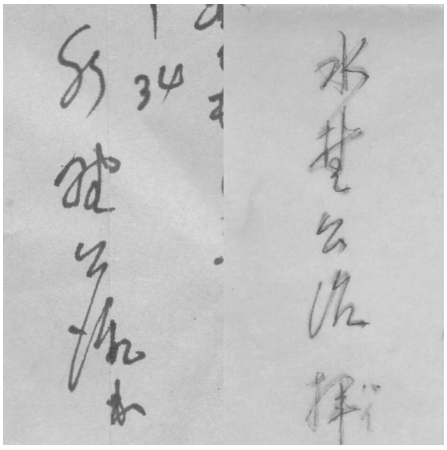
日本が無条件降伏を受け入れた頃，水埜は敗戦を知らず，1945 年の 8 月 27 日までソ連軍相手に牡丹江付近で交戦していた。「投降して牡丹江の収容所に収容され，広島に大きな爆弾が落ちて全滅したという話を聞きました。広島には家内と子ども 5 人を残してきましたが，おそらくダメだろう。親戚もたぶんダメだろうと考え，帰ってもしかたがないという気持ちになりました」[28]。

妻と子ども 5 人の消息について，家族全員原爆で全滅したわけではなかった。実際は，三人の女児は満洲からの引き揚げに際して死没，男児二人のうち長男は引き揚げ半年後に広島で病没した[29]。現在も存命なのは次男一人で，私に連絡をくださった方はその次男の子どもである。三人の孫がいる。

牡丹江の収容所から，いつヴォルガ河畔のゼレノドーリスクまで連れてこられたのかは不明である。いずれにしても 1948 年 6−9 月には，ゼレノドーリスクのラーゲリで強制労働に従事していた。それが中華人民共和国の誕生にともない 1950 年 7 月，日本人捕虜 969 名がスターリンから毛沢東へ「贈られる」ことになり，遼寧省・撫順の収容所に移管された[30]。「日本侵華戦争罪犯名冊」によれば，水埜は 1956 年 7 月 18 日に不起訴釈放されている[31]。帰国後，妻の実家の広島佐伯郡に身を寄せ，養鶏業を営んだ。次男の大学卒業にあわせて養鶏業はやめ，撫順時代の仲間の会社に勤め，やがて退職した[32]。晩年の生活は安定していたが，広島の学生たち相手の平和教育活動や，中国帰還者連絡会の活動に熱心に取り組んだ[33]。

孫の一人（次女）の方から，祖父がロシア民謡を懐かしげに歌っていた記憶があると教えていただいた。孫三人のうち長男の方によると，たまたま仕事でソ連へ出かける孫に対し，祖父は「モスクワ近くの収容所で若くて綺麗なロシア人女性に日本語を教えて文通をしていたことがある。ソ連は憎いが，ロシア人個人は好きだ」と話した。「イリーナ」という名前を聞いた記憶はないけれども，「百合さん」という名前を聞いた記憶がかすかにある。収容された地名は聞いていないが，「モスクワの近く」まで

28）「15 年戦争と広島・座談会」『平和教育研究』第 13 号（1985 年），52 頁。
29）『転落と再生の軌跡　中国戦犯は如何に生きてきたか』シンセイアート，2003 年，439 頁。
30）大澤武司『毛沢東の対日戦犯裁判　中国共産党の思惑と 1526 名の日本人』中公新書，2016 年。
31）『帰ってきた戦犯たちの後半生　中国帰還者連絡会の 40 年』〔76〕頁，〔99〕頁。
32）『転落と再生の軌跡　中国戦犯は如何に生きてきたか』439 頁。
33）2017 年 8 月 11 日付け，水埜公喜氏より太田宛メール。



貨車に乗せられ，連れていかれたと聞いた，生活は過酷でとても寒かった。水埜はピアノも少し弾けた。うまくはないが，ちゃんと曲になっていた。ピアノを弾くようになったのは，おそらく退職後のことではなかったか[34]。

ここまで細部が符合（ゼレノドーリスクが「モスクワの近く」とは言えないにせよ）すると，状況的にはイリーナさんと文通していた水埜公治と，中国帰還者の水埜公治は同一人物のようだ。そう頻繁に見かける姓名でもないので，ほぼ間違いないだろう。

念のため，孫の方に水埜公治晩年の肉筆書簡を見せていただき，筆跡を確かめた。右がイリーナさんに宛てた 1948 年 9 月現在，37 歳当時の水埜の筆跡，左は 1993 年 12 月現在，82 歳の水埜の筆跡である。45 年もの歳月により「水埜」の字体は崩れてしまったが，「公治」の筆跡はみごとに一致した。

7.

以上，水埜のたどった生涯を念頭に置いて，イリーナさんが 60 年以上ものあいだ，手元に保管していた水埜の古い手紙を再読すると，文面とはべつの「音声」，手紙のテクストの「倍音」が聞こえてくるような気がする。

いずれにしても，残された手紙にしたがえば，イリーナさんは 1948 年の 6 月半ばから 9 月半ばまでの三ヶ月間，ヴォルガ河畔のラーゲリで日本人俘虜から日本語の個人授業を受けていたのは事実である。日本語ネイティヴのいない当時のモスクワで自ら志願したのか当局から派遣されたのかは不明だが，イリーナさんのほかモスクワ東洋学研究所で日本語を勉強する学生たちは，日本人捕虜から個人教授でプラクティカルな日本語を習ったわけである。そのことについてイリーナさんは，他界する直前の創作短篇集あとがきでも触れていない。手紙が存在しなければ，これについて私たちが知ることもなかった。逆に言えば，いずれ後世の私たちが知ることを意図して，焼き捨てるようにと指示されたにもかかわらず，イリーナさんは日本人捕虜の手紙を亡くなるまで手元に残したのだろうか？幾重にも，疑問に疑問が重なるばかりである。

1948 年 9 月 29 日，水埜はモスクワのイリーナさんから手紙を受け取ったようで，

34）2017 年 10 月 7 日付け，水埜公喜氏より太田宛メール。

その返事をしたためている。おそらくイリーナさんは日本語で手紙を書いたのだろう，水埜は「間違って居るところは餘りありません。よく意味は解りましたから安心して下さい」と太鼓判を押している。

水埜は，イリーナさんの「女の先生」によろしくと述べている。おそらくそれは，イリーナさんの手元に残された写真から判断するに，先述のヴェーラ・マールコワのことだろう。モスクワに帰ってからイリーナさんはその先生宅を訪問し，おそらくイリーナさんの日本語が格段に上達していたからだろう，彼女に日本語を教えた水埜のことをその女の先生が誉めたというのだ。

仮にその先生がじっさいにマールコワであるならば，イリーナさんから聞いた水埜の日本語教育の話から，1920年代末から30年代にかけてのレニングラードで自身が日本語を習った鳴海完造のことがまざまざとマールコワの脳裏に浮かんだはずだ－「敬愛するマルコワさん，私はレニングラード大学であなたといっしょに日本語を勉強した鳴海です。忘れずに覚えておいででしょうか」[35)]。マールコワと鳴海の文通が始まるのは「雪どけ」の頃だから，この手紙からようやく9年も経ってから（1957年3月4日）のことになる。

イリーナさんは水埜に「御土産としてモスコーの写真とチャイコフスキーの楽符と誕生日の贈り物」を送った。「モスコーの写真，日本へのお土産として子供達にも見せましょう。それから楽符は日本でピアノをひくことにしましょう」。水埜はさしずめ「新しき星菫派」よろしく，音楽にも通じていたようである。晩年の，ピアノを弾く水埜の姿が目に浮かぶ。

生前，イリーナさんは何度か広島を訪問した。水埜と再会したかは不明である。とはいえ，古い手紙をいつまでも保管していたことから察するに，イリーナさん自身は日本人捕虜のことを終生忘れてはいなかった。おそらく，それが彼女の日ソ文化交流の仕事を支える礎だったのだろうと想像される。

1956年，日ソの国交が回復し，イリーナさんに活躍の舞台がようやくまわってきた。それまでせっかく日本語を習いながらも，得られた語学能力を実地に生かす場がなかったのだ。イリーナさんはまず新聞『イズヴェースチヤ』の外信部で働きはじめた。遠くノリリスクやディクソンなど北氷洋やアムール河沿岸にまで出かけた。日本とはもうなんの縁もないように思われていた矢先，日本とソ連の文化交流がはじまり，『ソビエト婦人』『ソヴェート文学』とイリーナさんはキャリアを重ねることになった。その後のイリーナさんの活躍は，本稿でほんの一端を見たとおりである。

物理的な文書はヒトの過去を映し出す。たとえわずかでも，ヒトの残した生命の痕

35）太田丈太郎『「ロシア・モダニズム」を生きる　日本とロシア，コトバとヒトのネットワーク』成文社，2014年，369−370頁。

跡を残している。電子化したところで物理的な文書に残されている生命の痕跡，においや肌触り，インクの濃淡，シミや汚れまでは伝わらない。イリーナさんがなにを思っていたのか，私たちにはもうわかりない。私たちにできることは，イリーナさんの残した文書から彼女の生きた姿を保存し，彼女の感じたコトバ（それはすなわち，彼女が出会って生きてきたいろいろな人たちのコトバにほかならない）を，その「倍音」と「反響」を甦らせることだ。わたしはそのように考えている。

Irina Kozhevnikova - Her Life and Archive

Jotaro OHTA

Irina Kozhevnikova (1925-2011) was the author of a biography of Varvara Bubnova (1886-1983), a Russian avant-garde artist, who had come to Japan in 1922 and had been teaching Russian and Russian literature at universities in Tokyo for many years.

Kozhevnikova's archive has been left in obscurity without any notice in Moscow and never studied by any Japanese scholars. This year I have brought the whole of her documents to Japan and started researching them in detail, and cataloguing them. The purpose of the presented article consists in the following:

1) To make them acceptable for academic use—some important letters and photographs of Varvara Bubnova during her stay in Japan; to make known the fact that not all documents of Bubnova are kept in RGALI (Russian State Archive of Literature and Art; Fond 3310) in Moscow.

2) To get them recognized by Slavists—Kozhevnikova's multifaceted activity as a translator of Japanese and her invaluable personal materials (photographs with Japanese writers and academics; her letters to Japanese friends who knew Bubnova as an artist, as a teacher, and so on).

3) To make them public—letters to Kozhevnikova from a Japanese officer, Kimiharu Mizuno (1911-1996), who had been forced to work in a Soviet labor camp near Kazan, Zelenodol'sk, after the Second World war; he'd been fighting against the Soviet army in Manchuria till the end of August 1945, and been carried far away to the West, to the camp at the bank of the Volga; and there he taught practical Japanese to students like Kozhevnikova from the Moscow Institute of Eastern studies; in 1950, according to the treaty by Stalin and Mao, he and his colleagues were taken back to Manchuria again, to the camp in Fushun, only to be released in July 1956.